

特別講演（最終講義）

マレーシア，日本，華人，それに日本語

原 不二夫

蔡 皆さん，こんにちは。今日の司会を担当させていただきます，アジア学科の蔡です。ただ今より，南山大学外国語学部アジア学科，そして，南山大学アジア・太平洋研究センター共催による特別講演，原不二夫先生の最終講義を始めさせていただきます。

まず，簡単に原先生をご紹介したいと思います。実は，その必要はないかもしれませんが。ここには，多くの教え子に加え，同僚たちがいます。ただし，原先生のこの立派な小冊子を持っている方は，7ページの原先生の履歴のところで，後ろから3行目，1999年南山大学着任，その所属は英米学科教授とありますが，実は，これは臨時的なものです。アジア学科は2000年発足ですが，原先生は1年早めに来られて，その発足の準備があったので，臨時的に英米学科の所属となったのですが，実際の肩書きは，アジア学科長でした。原先生は，アジア学科長の初代だけではなくて，連続三期5年間，アジア学科の学科長でした。ですから，われわれは，いつも，原先生のことをアジア学科のお父さんと呼んでいます。これは間違いありません。そのお父さんの研究業績の多さは，皆さんも一目瞭然だと思います。

今日の講演のテーマは，「マレーシア，日本，華人，それに日本語」ですね。要は，原先生の研究半世紀の集大成といえます。この小冊子のタイトル「売れない研究半世紀」は原先生ご自分の命名で，ご本人はご謙遜されて，売れないとおっしゃっていますが，われわれにとっては，何よりも価値の高い宝物であると私は思います。

それではこれから外国語学部長，藤本先生にご挨拶をお願いします。

藤本 皆さん，こんにちは。ただいま紹介いただきました，外国語学部長をしております藤本と申します。

今，蔡先生のほうから原先生の履歴については簡単に紹介していただきましたが，外国語学部長としても，一言申し上げます。

原先生は，1999年に外国語学部にご赴任され，最初は英米学科，その後，2000年度からのアジア学科でのご所属を含め，13年間，南山大学に奉職されました。初代アジア学科長として5年間，また，大学の評議会の評議委員としてもご尽力いただきました。まず，このことに対して，感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

それで、高いところから申し訳ないのですが、研究者として、あるいは教育者として、なるべく私との関わりのようなものを、学部長というよりは、お近くにいさせていただいて感じたことなどを、最初にお話ししたいと思います。

まず、教育者という点からいいますと、先生のご専門は、東南アジアの華人社会、それからマレーシアの現代史です。この中にも、現在アジア学科に所属している学生の皆さん、それから卒業生の皆さんが大勢おみえだと思えますが、アジア学科はご存じのように、中国語とインドネシア語を主要言語にしながら、中国研究、インドネシア研究、そして広く東南アジア、日本も含めたアジア地域の研究教育をしているわけです。

原先生は、東南アジアの華人社会、それからマレーシア現代史がご専門です。残念ながら、私は原先生の講義を受けたことがないのですが、先生の研究の特徴に関して申しますと、広い意味で、2つの点があると思います。1つは歴史です。歴史的な視野で、一国だけではなく、広い東南アジア地域をカバーされているということ。もう1つは、相互の関係といいますか、単に中国、インドネシアだけではなく、中国と東南アジアを架橋するような授業をされたのではないかと考えております。そういう意味では、学生の皆さんは非常に幸せで、広い視野からの指摘、あるいは、国を超えた視点を大いに学ばれたことと思います。今日は最終講義ということですから、このような視点から改めて学べることを期待したいと思います。

教育者としての原先生について申し上げますと、私は実は、ここに立ってお話する前から知っていたのですが、南山大学の教員紹介のウェブページの中に、趣味という欄があります。原先生がそこに、どのようなことを書かれているか、ご存じですか。「正確な日本語」と書かれています。それから、皆様へのメッセージという欄には、「横文字の外来語を使わずに授業をします」と書かれております。

私は英米学科でアメリカ研究をしていますので、どうしても横文字を使ってしまうのですが、原先生は非常に日本語を大切にされておられます。やはり、言葉というものは、非常に厳しい目線で、本当に正確な言葉をもって相手とコミュニケーションを取る、あるいは自分の言いたいことを発信するということだと思います。そういう意味では、私自身、本当に恥ずかしいのですが、正確な日本語を使えているかどうかは分かりませんが、今日、先生から精一杯学びたいと思います。今日のタイトルに、「マレーシア、日本、華人、それに日本語」とありますので、ぜひ楽しみに、皆さんとお聴きしたいと思います。

さて、今申し上げた通り、先生は、東南アジア全般、そして日本の占領期の東南アジアに関心を持って研究されていますが、実は、私にも思い出があります。以前、「国際関係論」の授業を担当していたときに、一番前に座っている男子学生がいました。アジア学科の学生だということは後から分かりました。彼は毎回、質問する学生

でした。しかも、「先生、理論的に、これはどう考えるのですか」というような、非常に鋭い質問をしてきました。大学では、男子学生のほとんどは後ろに座っているという感じなので、前に座っているとは珍しいなと思っていました。毎回、真剣に質問するものですから、彼の目を見ながらずっと講義をした記憶があります。

それで、多く質問してくるものですから、誰のゼミですかと尋ねると、原先生のゼミということでした。歴史大好き人間というような感じで、確か、卒論も日本のベトナムへの賠償について書きました。卒業後は、東京の大学院に進学し、現在は、ベトナム語が非常に流暢なため、大手の電気通信機器メーカーに勤務し、ベトナムに駐在しています。まだ若いのですが、期待されている人物で、大活躍されています。

のちほど申し上げますが、私はベトナム戦争のことを研究しているので何度もベトナムに足を運んでいるのですが、そのときには必ず彼と会い、原先生を思い出しながら、いろいろ付き合いをしております。

話が長くなるといけないので、もう一言だけ申し上げます。研究面では、先生は2009年に、『未完に終わった国際協力 マラヤ共産党と兄弟党』という本を書かれております。マラヤ共産党の話なのですが、中国共産党やベトナム労働党、それからタイ、インドネシアの共産党との関係を、党の関係者のインタビューも交えながら、非常に精緻に分析されていて、私も大いに勉強させていただきました。

それで、先生との繋がりで少し残念なのは、私がマラヤ共産党については、全くの門外漢であることです。1つだけ知っていることがあるのですが、イギリスは40年代後半から、マラヤ共産党の鎮圧を続け、60年に最終的に鎮圧しました。そのとき、イギリスは、いわゆる対反乱戦略というものを行ったのです。そして、それを学んだのがアメリカです。1961年にケネディ政権が登場して、ベトナムでの対反乱戦略を実施しましたが、それは、イギリスがマラヤ共産党に対して行った鎮圧作戦から学んだものでした。

そういった点でも、先生からもっと学べればと思うのですが、残念ながら今日が最後です。今日は、本当にしっかり学んで、先生から吸収したいと思っています。

最後に、実は、私は、先生と顔合わせることが、よくあります。もちろん、教授会でもお会いするのですが、先生は自転車で通勤されてきました。私は、いりなか駅から歩いてくるのですけれども、いつも颯爽と風を切るような感じで自転車に乗っておられるのを拝見しました。

原 いや、よたよたですよ。

藤本 いや、よたよたじゃありませんよ。私のほうが、よたよただと思うのです。非常に颯爽とした姿で、きっとお気持ちが若いからだろうと思います。

ぜひ、今後もいろんな形でご教示いただければと思いますので、よろしく願いいたします。

では、今日の最終講義を、私も含めて、ぜひ楽しんでいただければと思います。どうもありがとうございました。失礼致します。

蔡 藤本先生、どうもありがとうございました。今日は、この講演に、原先生のご家族もいらっしゃっておりますので、小林先生からご紹介いただきます。

小林 赤ちゃんが待ちきれずに、声を出しているのです、皆さん、気になってらっしゃったかもしれません。ここで、原先生のご家族を紹介します。まず、奥さまです。そして、先生には娘さんがお2人いらして、こちらが上の娘さん、そして下の娘さんです。それから、上の娘さんの旦那さまです。そして、こちらは先生にとってはお孫さんになります。それでは、一緒に拝聴いたしましょう。

蔡 それでは、原先生、教え子の前で、同僚の前で、そしてご家族の前でのご講演をお願いします。

原 今日は、こういう機会を設けてくださりまして、どうもありがとうございます。マイクは、要らないですね。声の質は問いませんが、量はかなりあるので、後ろの方も聞き取れると思います。聞き取れなかったら、言って下さい。

ともかく、13年間、ここにこんな人間を置いて下さった、南山学園、南山大学、それから外国語学部、アジア学科、さらにはアジア・太平洋研究センターには、とても感謝しております。どうもありがとうございました。これからこの紙の筋立てに沿って、さっとお話しします。

南山大学に来て一番驚いたことは、終わる時間は別ですけれども、授業の始まる時間が非常に正確だということです。授業の始まる時間、終わる時間がきちっと守られています。私が前に非常勤で教えていたところなんかは、20分遅れて行くのが学生に対する礼儀だと言われていました。ここへ来てからもそのつもりでいましたら、ここではベルが鳴ったときには、もう壇上にいなければいけない。そういう厳しい授業でした。ともかく、それは守ったつもりです。学生による授業評価でも、これまで、その点の評価が一番高かったですね。そのように、ここでは時間厳守ということ学びました。

それから、もう1つ。外国語学部の学部長をなさった岩野先生が最終講義をなされたときに、「自分は私的な理由で休講にしたことは一度もない」とおっしゃいました。つまり、病気などのことですが。これは立派な授業をされた、先生の鑑だと思いまし

た。

私がここで自慢できることは、同じように、私的な理由で休講にしたことは一度もなかったことです。（拍手）

どんなに酒を飲んでも、毎日講義に出てこられたことは、私にこういう身体を与えてくれた両親に感謝したいと思います。

それから、私は、名古屋に1人で住んでおりましたから、13年間、家族とは別々に暮らしていました。それによく耐えてくれたもんだと、そういう感謝の念もあります。ただし、逆に、別々に暮らしていたからこそ、これまで持ったという面もあるんじゃないかと思います。その辺のところは、聞いてみないと分かりません。

それはともかく、もう1つ、体調という点では、私、今までほとんど話したことがないのですが、3つ欠陥のようなものがあります。

1つは、中学の理科の時間に、先生が、塩酸だか硫酸だかのビンの上に、直接顔を出してはいけませんと言ったんです。私は、そんなことがあるか、そんなことはないだろうと思って、ビンの上に鼻を持っていったら、ツーンときて、なんだか訳が分からなくなってしまいました。それまで、鼻は非常によかったのですが、それ以降おかしくなって、片方の鼻が常に塞がる状態になりました。ですから、吸収する空気が普通の人の半分なんです。そうすると、思考能力も当然半分になります。これが欠陥の1つ目です。

それから、2つ目は、もう30年ぐらいになりますが、何が原因か分かりませんが、私は心房細動というものになりました。要するに、心臓の血管を送り出す命令系統が、ものすごく乱れているのだそうです。命令系統が統一されてない。だから、送り出される血液は、むちゃくちゃになるんです。だから、脈拍なんかは普通非常に規則正しいものですが、私の脈はメチャクチャなんです。こういう脈ですから、私の考えることもメチャクチャなんです。それが2つ目の欠陥です。

それから、もう1つは何かというと、ここへ来たころ、口内炎ができて、膿んで、それを病院で切り取ってしまいました。そうしたらそれがおかしくて、神経がどうも切れてしまったんです。今でも口がちょっとおかしいのです。そうすると、頭から口に命令が行っても、口がそれに従わないんです。ですから、私がしゃべることは、口が勝手に言っていることで、頭とは関係ないのです。

こういう3つの欠陥を持ちながらも、個人的な理由による休講はありませんでしたから、これは、よかったのか悪かったのかは分かりませんが、ともかく、そんな私を置いてくださった大学には、感謝しております。

私の研究対象はマレーシアということです。1967年にアジア経済研究所に入って、そこからマレーシア研究が始まったのですが、なぜ、マレーシアか。私は入るときには全然マレーシアなど知らなかったのですが、入ったときに、責任者の人から「希望

を3つ言え」と言われたのです。

私の学生時代には、東南アジアのことなんかを教える科目はありませんでした。東南アジアで知っているといえば、大国だけです。それで、中国、インド、インドネシアと、この3つを挙げたんです。希望を3つ言えと言われましたから。しかし、その責任者の人は、「まあ、それはともかく、マレーシアをやれ」と、こう言ったんです。何のために希望を聞いたのか分からないのです。

始めてみたら、いろいろ面白くなってきて、結局、今まで続けることになりました。それが、そもそもの発端です。

これは、どこの国にも言えることだと思いますが、研究してみると面白い。アジアに限らず、どこの国でもきっとそういうことになると思います。他の国を研究されておられる先生方も、そういうことで、のめり込んでおられるのではないかと思います。

そのアジア経済研究所には31年半おりました。それからここへ来て13年になります。アジア経済研究所にいるとき、最初のころはかなり自由に研究させてくれたのですが、段々に通産省の締め付けが厳しくなりました。私は歴史の分野に入り込んでいたのですが、歴史は通産省には歓迎されない。今のことをやれと。今の日本の経済に役に立つことをやれという締め付けが、だんだんと厳しくなっていった時代でした。

幸いにも、明石先生からお声をかけていただいて、その後、厳しい審査があったわけですが、ここに来ることができました。

ここでの研究はどうかと言いますと、ここへ多くの先生がほぼ同時に入られたのですが、説明を受けた時に、縄文時代の研究をされている方もおられたんです。考古学です。これはありがたかったです。前にいたところでは、戦争のことでさえも古いことだと言われていましたから。それが、ここへ来たら縄文時代も認められる。これは、なんといいことかと思いました。それはもうありがたかったです。

通産省の締め付けに該当するような締め付けも、ここにはなくて、業務の面では、いろいろと厳しいことがありましたが、研究については、一切口出しがありませんでした。これは、ありがたかったと思います。これが、2つの場所の違いです。

それから、名古屋との縁についてです。本日のタイトルにも「マレーシア、日本」という言葉が入っていますが、日本とマレーシアとの研究は、私の研究の柱の1つです。

なぜこのようことを始めるようになったかと言いますと、1972年から74年まで、マレーシアのパナンの大学に置かせていただきました。そのときに、日本とマレーシアの歴史的な関係を研究しているマレーシア理科大学（USM）の先生に、その研究を見せてもらい、これは面白いと思いました。その先生は、マレーシアにある、イギリスが作った様々な資料を見ておられたのですが、日本人が書いた戦前の資料は使っ

ておられませんでした。そこで、それを勉強するのが私の役目ではないかと思って、そこから研究が始まりました。

最初に出した本は、『忘れられた南洋移民』という本です。そこで扱ったのは、実は、名古屋近郊の七宝町出身の人でした。今、七宝町は合併によって名前が変わったかと思います。

そのころは東京の近郊に住んでいたのですが、東京でいろいろ文献を当たって、市役所や町役場に直接問い合わせをして、可能性のある所ということで七宝町に行つて、そこで尋ね当てたのですが、そのときに、八事とか、そのような地名も聞きました。

そのときには名古屋に来るなんていうことは考えもしませんでした。名古屋に来ることになって、その場所にはまたもう一回行きました。そんなこともあり、以前から名古屋には縁があったのかなという思いがしています。

マレーシアの歴史をずっと勉強していましたが、トヨタ財団による事業で、戦争中のさまざまなことをまとめる研究会がありました。その対象は、インドネシアが最初で、フィリピンがその次でした。そして、マレーシアの場合には、明石先生が中心になってそういう会を作って、東京にいるころも、またこちらへ来てからも、明石先生の下で勉強を続けました。ここでもまた、いろいろと勉強させてもらいました。

その下のところに、「もっとも嬉しかった邂逅」ということがあります。バラバラにお配りした紙を見ていただきたいのですが、これはどういうものかと言いますと、最初に見たのはこちらです。これは、アジア経済研究所にいるころ、私の先輩の竹下さんという方が教えてくれたものです。マレーシアには、New Straits Times、通称NSTという新聞があります。これはその後与党が運営するようになった新聞なものですから、反発もあって最近はあまり売れなくなりましたが、このころはまだ、マレーシアで一番大きな英字新聞でした。

そのNSTの1990年の9月22日の記事です。マレー半島の一番南にジョホールという所があります。平城天皇の息子さんで、一時は皇太子にもなった高丘親王は、出家して、中国へ渡り、中国からインドへ行く途中で、マレー半島で亡くなったという人だそうです。その高丘親王の記念碑が1970年にジョホールに建てられたことを、1990年に新聞が取り挙げました。この記事には、ジョホール・バルーに高丘親王の記念碑があると書かれています。90年の10月5日の記事は、その9月22日の記事を見たDr. S. Durairajaという人が、そのStupa = 卒塔婆、すなわち、この記念碑は高丘親王の記念碑であり、自分は、高丘親王の亡くなった場所についていろいろな証拠を集めた、という投書記事なのです。

高丘親王がマレー半島で亡くなったということは、よく言われていましたが、新しい説が出てきたと思って、この記事を見て新発見かと思って喜んだわけです。

戦争中のことを勉強するために、戦争中に出されたいろいろな資料を見ていた最中に出会ったのが、このもう1つの紙の記事です。これは、ここに書いてあるようにマライ新報です。マライ新報というのは、戦争中に日本軍がクアラルンプールで発行していた英語の新聞です。そこに、EVIDENCE THAT PRINCE TAKAOKA DIED IN LUKUT という記事が載っていたのです。この記事は、1943年の6月21日、つまり占領の最中のものです。因みにこの記事から3カ月くらいあとに、私は生まれました。

これを見ますと、NSTの記事と同じ、Durairajaさんの「新発見」に関する記事なんです。

NSTの記事に取り上げられた、高丘親王がどこで死んだ、その証拠がうんぬんという同じことが、このマライ新報の記事にも書かれています。この記事の5行目からご覧ください。Mr. S Durairajaという人から、日本人の新聞記者が聞いて、この記事を書いたと書いてあります。そして、戦争が終わって45年経った時点で、同じような記事が、Durairajaさんの投書としてまた現れました。

この2つの記事をただ並べてみてもなんともありませんが、これが同じ内容の記事だということに気づいた時には、私は非常にうれしかったのです。歴史研究というのは、あまり楽しみがないかと思われそうですが、こういう楽しみがあります。何十年もの時を隔てて、同じ人が同じことを述べた記事が載った。それを結びつけたということは、歴史を勉強している者にとっては、大変にうれしいことです。そのようなことは、他にもいくつかあったのですが、これが私にとって一番うれしかった邂逅、出会いです。

次に、華人のことについてですが、先ほどのワークショップで篠崎さんからもご指摘いただきましたが、要は、マラヤの華人のことです。戦争以前は、東南アジア全般でそうだったわけですが、華人の政治活動の研究というと、中国の抗日運動をどれほど華人が支援しているか、そんなのが一般的な研究でした。戦後の華人の研究について言えば、戦前はそうだけれど、戦争を境に、マラヤに日本軍が入ってきて、自分たちの住んでいる所を守らなければならなくなったから、居住地への愛国心という意識が作られて、それが戦争で固まった、定着したと。先ほど篠崎さんが、日本の70年代以降の研究は必ずしもそうではないとご指摘くださいましたが、マレーシア、シンガポール辺りの説ですと、戦争を境に一変して、戦後はマレー人と共に独立のために戦ったというのが一般的だったのですが、私はここに疑問を持ったものですから、いろいろなものに当たって、中国との繋がりはずっと後まで続いていたのではないかということを行いました。

現在のシンガポール国立大学、当時のシンガポール大学の図書館では、時間ギリギリまで資料を見て、職員と一緒に裏口から出たなんていうこともありました。その結

果が、先ほどもワークショップで取り上げていただいた『マラヤ華僑と中国』という本になりました。これも、南山大学の南山学会から助成をいただきまして、その点でも感謝しております。

この本については、多々ご批判もありまして、ここに書いてあります「形式主義」というのは、要するに、例えば、政治集会や華字紙の休刊日について書きましたが、これはどういうことかと言いますと、かつては中国と関係のある日が休刊日でした。例えば、孫文の誕生日や中華民国の樹立のきっかけとなった10月10日、いわゆる双十節などが、マレーシアの華字紙やシンガポールの華字紙の休刊日だったのです。それが、だんだんと変わっていき、消えていきました。そういう過程を辿ったものです。また、戦争が終わった後の45年、46年、47年あたりには、中国と関係のある政治集会が、ずいぶん盛んに開かれました。典型的なのは、中華人民共和国ができる前の国慶節である10月10日の双十節です。その日には各地で非常に盛大な祝賀集会が開かれました。そんなことを、この本では辿っていきました。

しかし、これはマレーシアの人に言わせると、要するに現象面を見ているに過ぎない、形式主義だということでした。そこに参加していた人たちの心のうちがどうだったかということまで、お前は分かっていない。そういう批判を受けました。

そのような批判は甘んじて受けるしかない、私は思います。本当に心の底まで分かるなんていうことは至難の業で、できるだけそれに近づくということが、研究者のすべきことなのだろうと思いますが、残念ながら、私にはそこまでの力量がありません。先ほど申しましたが、若い人に、そういう心のうちまで分析できるような研究をしていただけたらと思います。

次は、同時多面性です。これも先ほど申しましたが、常に1つのものだけに捉われるのではなく、いろいろな面を見なければいけないということで、どういうときには、どういう方面に働きかけるとか、そういういろいろなものを見なければいけない。1つのものだけに捉われるなという批判もいただきました。これもまた私の力量不足ということで、若い人たちはそういう面も参酌しながら、新しい研究を築いていただけたらと思います。

普通の授業ですと、ギリギリ最後の時間までやらなければいけないのですが、このお話は、なるべく短い方がいいと言われてますから、なるべく短く終わらせたいと思います。

その次のところですが、マラヤ共産党研究ということで、最近ではもっぱら、このマラヤ共産党のことをやるようになりました。マラヤ共産党は、マレーシア、タイ両政府と1989年に和平協定を結びました。この時代はまさに、東西冷戦の時代から、東欧の崩壊、ソ連の崩壊と続き、アジアの共産党の変容というか変質というものが起きた時期です。ですから、マラヤ共産党も、国内での展望がなかなか開けなくなって

いたということと、中国からの支援がなくなったということで、こういう和平協定になったわけです。

日本人も2人、このマラヤ共産党のゲリラ活動に参加していて、協定締結の翌年の1990年初めに、お2人とも帰ってきました。その後、もう亡くなくなりましたが。

少なくとも組織としては、マラヤ共産党は歴史的な使命が終わったということが明らかになった時期です。

私も、もう高齢で、先行きたいことはない、あんまり長くない、もう過去の存在です。組織としてというわけではないのですが、個人として、過去の存在です。過去の人間が、過去のものを研究するということは、非常にいいことではないかと思ったわけです。私のような老人が、将来発展する何とかなどということの研究したら、これはもうお笑い草です。そこで、マラヤ共産党のことを勉強するようになりました。

いろいろな形で資料を集めました。共産党の人たちはマレーシア、タイと和平協定を結んだ後、マレーシアの国境に近い南タイに、タイ政府から入植地を与えられ、そこを自分たちで開発して、いわば、入植者として生活することが始まっていました。そういうところへ行って話を聞いたり、昔の資料をいろんな人から見せてもらったりして勉強しました。

そういうものをまとめたものが、先ほどもご紹介いただきました『未完に終わった国際協力』という本です。副題が「マラヤ共産党と兄弟党」となっています。そのような本を出させていただきました。これもまた、南山学会から助成をいただきまして、大変感謝しております。

名古屋には、名古屋大学出版会という出版社があるんです。これは見たところ、名古屋大学の出版会というふうに普通は読めるのですが、かなり前に当時のマルクス学長から、「あれは名古屋の大学出版会だから、名古屋にある大学ならどこでも引き受けてくれる出版社だ」とお聞きしました。

南山学会から助成をもらえることが分かったのでそこに電話をかけて、マラヤ共産党についての本を助成金付きで出していただけませんかと言うと、言下にそれは駄目だと言われました。これは、本の内容が駄目だからというわけではないんです。内容も駄目と言えば駄目なのですが、その内容を見て、これが困るというのではなく、マラヤ共産党云々というタイトルを聞いて、もう駄目だということなのです。

結局、風響社さんという出版社さんが、そういう題の本でも引き受けてくださるということで、おかげさまでこの本は日の目を見ることができましたが、ともかく、その本は売れません。これは、共産党関係のものが売れないというだけではなくて、作っていただいた今日の冊子にも、「売れない研究半世紀」と書いてありますが、私の研究で売れた本なんていうのは、ないんです。よくもまあ、こういうものを支えて

くださって、いろいろなところで出版して下さったと、感謝しております。

だんだん年を取ってきて、今、何をしゃべろうとしていたかということが出てこなくなる時があります。実際の授業のときもこういうことがよくあって、人の名前を書こうとするとその字が出てこないとか、授業が終わって教室を出たら、どっちへ帰ればいいのか分からなくなったりしました。本当に、もう限界ギリギリまで授業を持たせていただきまして、この点でも南山大学には感謝しております。

最近、そのマラヤ共産党の人たちのうち何人かは、政府との話し合いがついて、マレーシアに帰ってきて住むようになりました。しばらくは何もできなかったのですが、だんだんと回想記が出るようになりました。その回想記の他に、昔の文献を集めて再版と言いますか、復刻するということもするようになりました。このパンフレットの中にありますが、その文献集の中に、私の書いたものがそのまま再印刷されています。そんなものが2つばかりあります。売れない研究でも、こういうところで使ってくれる向きもあります。このようなことも、また、有難いことだと思います。

ともかく、ギリギリまで東南アジア、マレーシアのことを研究してきました。しかし、私の能力及ぶ範囲では、もうこういう研究をする余力はなくなりました。そこで、退職したらどうするかということになりますが、そこでこの最後のところに行きます。

その前に、私の部屋にある本ですが、これを去年、中国の福建省の厦門（アモイ）大学の先生が、厦門大学の図書館で引き受けてくださるとおっしゃってくれたので、これはよかったと思って安心していました。つい先日、どうやって送り出そうかと思って、運輸会社に電話をかけてみると、中国の税関の許可を取らないと送り出せないと言われました。そこで、心配になって厦門大学の先生に聞いてみると、結局、やっぱりそうなのです。中国税関の許可を取らないと、輸入できないそうです。寄附するという場合でも、輸入手続きを経なければいけないということで、それについては、目録を予め作って寄せせということになりました。それで、今少々困っているのですが、私1人ではできないので、どなたかに手伝っていただいとを考えています。もう1つ困ったのは、中国語の本はいらないと言われたことです。その結果、南山大学の図書館やアジア・太平洋研究センターでも検討して下さって、中国語の本はちょっと多すぎるので、もう少し考えろと言われたのですが、ともかく大筋としては引き取って下さることになりました。

それはよかったのですが、中国の税関で引かかる本はどのような本かということをお中国側から教えてもらいました。まず第一に引かかる本は、どのような本だと思いますか。おそらく皆さんは、民主化などの類の本だとお考えになると思います。もちろんそれもあるのですが、それ以上に引かかる本は、共産党に関する文献だそうです。マラヤ共産党の本なんて、これはもう一切まかりならんということだそうで

す。あとは、中国の政治変動や日本の国際協力というものも困るらしいんです。中国は、外国からの批判的な意見を国内に知られることに対して非常に神経質になっているということです。また、かつて共産主義だった国や、共産党を支援していたということについても、押さえつけないとか、知られたくないということがあるようなのです。そのため、私の本の中には行きどころがなくなるものがいくつかあるかもしれません。その場合には、また、うちに持っていかないといけなくなります。狭い家に、どうやって収容しようかと思って困っているのです。それが、私の本の未来像です。

最後に、日本語のことです。どうしてこういうことが気になるようになったのかと申しますと、最初の頃は憶えていませんが、ともかくいつの頃からか気になるようになりました。

紙に書いて持ってきたんですが……。ああ、ありました。こうした物忘れも限界を感じさせることの一つです。

どのような日本語が気になるかということなのですが、例えば、新聞やテレビによく出てくるものに、「何とかを触る」という言い方があるんです。「体を触る」とか、「電車の中で女性の胸を触る」とか、その「を」が気になるんです。通常は、「に触れる」あるいは「に触る」のはずなんです。それが、今は「を触る」「を触れる」のほうが一般的になっています。こういうものが気になるのです。

それから、「何々によると」「何々によりますと、……何々としています」という表現が多いのです。ところが「何々によると」ならば、本来は、受ける方は「ということですが」、あるいは「だそうです」になるはずですが。「……何々としている」ということであれば、「誰々は」あるいは「何々は……何々としている」が正統な日本語だと思います。

また、「輩出」という言葉があるのですが、これは、他動詞として使われることのほうが今は多いのです。「何々を輩出する」という使い方です。「輩出」は、本来は自動詞で、「優秀な人材が次々に出てくること」なのです。ところが今は、送り出すことという意味で使われることのほうが圧倒的に多いようです。

それから、放送で、内閣の何とか大臣がしゃべっている言葉を聞くと、「誰々が、何々していただく」というのが、これまた多いのです。「皆さん方が、ご清聴をしていただく」。これも、「いただく」ならば、「誰々に、何々していただく」が、本来の日本語だと思います。これは、若い人がどうのこうのというよりは、日本中がこうなっているのです。

それから、例えば、自動詞と他動詞という点では、「何とかという組織が結成した」とか、あるいは「何とかという組織が設立した」というのが、答案によく出てきました。「結成された」、「設立された」ではなくて、「結成した」、「設立した」というもの

が多かったのです。これは、答案を見ていて、とても気になったことです。

それから、「を」の繰り返しです。これも、大臣がしゃべった言葉をメモに取ったのですが、このように私はいつも人のしゃべることや書いていることでおかしいと思ったところをメモに取って、それを記録しています。「宣言を発令をする」、あるいは「対策をお願いをする」、「関係を強化をする」。これらは大臣の言葉ですが、こんな言い方が多いのです。

こういうことが気になるので、私は、退職したら余生はこういう日本語の是正に捧げようと思っています。これが私の使命だと考えています。

ただ、私が前から所属しているある会で、「皆さん方の原稿に常に目を光らせ、赤鉛筆を持って朱を入れている」と言ったところ、ある人から、「お前の発言のおかげで発表する者が極々わずかしかいなくなった」とお叱りを受けたことがあります。

さらにその何年も前のことですが、先輩から、「お前は人の言葉にケチをつけるから、みんなに嫌われるんだ」と言われました。私は、毒にも薬にもならない人間で、誰も敵にしないのが取りえだと自分で思い込んでいたのですが、どうもそうではないようなのです。結構敵視されることがあって、これがどうしてなのかよく分からないのです。皆さん方にはよく分かるのでしょうか、私にはよく分かりません。

そういうことで、ともかくこれからは研究能力という点は、もう、もうというか、昔から駄目ですが、またさらに駄目になって、せいぜい、この日本語について愚痴を言うことが、私に残された道ではないかと思えます。使命とは言えないかもしれませんが。ともかく、これからは能力が及ぶのはそんなところだという自覚を持って、わきまえて、そちらの方面に余生を注ぎたいと思えます。

あっちに行ったりこっちに行ったりして、とりとめのないお話になりました。雨の中を駆けつけてくださり、遠路来てくださった方も何人かおられます。こういう拙い話で終わるのは申し訳ないのですが、これを以って感謝の言葉にいたしたいと思えます。どうもありがとうございました。

(拍手)

蔡 原先生、どうもありがとうございました。最後の日本語についてのご指摘を拝聴しますと、私は下手な日本語をしゃべる勇気がなくなってしまいます。でも、大変興味深いお話でした。

今回、初めて原先生のご講義を聞かせていただきまして、今までもっと聞いておけばよかったのですが、残念なことに、これが最終講義です。これからは個人的に教えていただければありがたいと思えます。それでは、アジア学科長の小林先生、ご挨拶をお願いします。

小林 皆さん、お久しぶりです。見渡すと、一期生から今の在生までいますね。こんなにたくさんの方が来てくれるとは思っていませんでしたので、コピーが足りなくなってしまってごめんなさい。忘れる前に言っておきたいのですが、受付で芳名帳にお名前を書いてもらったと思いますが、まだ書いていない方はぜひ後で書き込んでください。その芳名帳は、後ほど原先生に差し上げる予定で、特別のものをあつらえて書いてもらっていますので、ぜひ、書いてから帰ってくださいね。特に卒業生は何年度卒業、もしくは入学年でもいいですが、原先生に分かるように書いてください。

さて、私は今、学科長ですが、二期生、三期生ぐらいまでの皆さんにとっては、学科長というのは原先生がなさるものと思っていたと思います。アジア学科は12年目になりましたが、原先生は最初の5年間、ずっと学科長でいらっしゃいましたので、今日、私がここに立って挨拶をしますと、「え、どうして小林先生が学科長？ 一番背が低いのに」という声が聞こえてくるかもしれません。でも、今日、これだけの卒業生が集まってくださったことは、とにもかくにも、皆さんの原先生への思い、それから卒業しても、やっぱりアジア学科に、南山大学に愛着を持ってきているんだなと思うと、とってもうれしいです。

このアジア学科で皆さんは、中国語とインドネシア語に苦しめられました。しかし、その2つを学ぶことによって、広い視野が養えたのではないかなとも思います。

私たちにとって、原先生の講義「華人研究」は、学科の大きな柱だったので、それを失うことは、とても寂しいです。でも、今先生のお話にあったように、先生は、今からまた、皆さんや世の中全般に対して、正しい日本語の普及に並々ならぬ意欲を持たれております。先ほどのよくある間違いを幾つか聞くと、今後はテレビで誰かの発言を聞いても、「あ、今の助詞はおかしい」と言って、だんだん、夜寝られなくなってしまふかもしれません。私も、特に国会の答弁を聞いていると、どこかしら、「あ、今の変だな」と、いつのまにか原先生の病気がうつってきたような気がします。

原先生は、同僚としては非常に心強い助っ人でした。私たちは常々、日本語を書いて世の中に発表しています。この日本語でいいだろうかとというときには、必ず原先生のところへ行き、これでいいでしょうかと見ていただいていたのですが、これからは自立して、そういうものを自分たちでチェックしなくてはいけないことになります。

そして、原先生は皆さんも知っているように穏やかな先生です。私は何かにつけ、すぐ怒ります。「何だ、これは、けしからん」と私が言うと、原先生がそばで、「本当だあ」と、相づちを打ってくださるんです。これも、今からはなくなるのかなと思うと寂しいです。

さて最後に、研究者としての先生の本領と言いますと、それはもう、先生のご著書を読まれるとはっきりするのですが、歴史研究としては見本にしたいものばかりで

す。歴史に関する理解で、思い込みがないか。学問では、パラダイム、分析視角というものを問われます。今まで通用していたパラダイム、コンセプトに誤りがないか。その誤りを指摘するための適確な資料を提示しているか。原先生の「マラヤ共産党研究」を読みますと、使われた資料を見るだけで、これだけ集めるのにどれだけの精力をついやしたか、それからまた、この研究者になら資料を渡してもいいと見込まれる、その力量を身につけるのにどれだけの努力が必要であったかということが分かります。

さらに、また広い視野ですね。研究にも時流というものがあるのですが、時流に流されずに、先生はご自分では「売れない研究」とおっしゃいましたが、大局を見て、歴史の流れ、そして転換点をつかんで、ここが重要だと思ったところには食らいついて、そして第一次資料、原典を示して、世の中に成果を問われてきました。その研究を見極めることのできない出版社が出版を断っても、数十年後は必ず評価されるだろうと泰然自若と構えていられるだけの度量を備えていきたいと、私自身も考えています。

本当に多くのことを教えてくださった原先生が、南山大学を去られるのは寂しいのですが、こうして多くの人に来てくださったことは、本当にうれしく思います。今日は皆さん、どうもありがとうございました。